

tab

No.
31
2
0
1
2
/ 02
/ 15

後藤美和子 / 木村和史 / 野村龍
福島敦子 / 中村剛彦 / 長尾高弘
水島英己 / 秋川久紫 / 倉田良成

櫛 = *Machilus thunbergii*

CONT.

詩篇

- 後藤美和子：あいさつ／01
野村 龍：蜜蜂の歌／02
福島敦子：花／04
秋川久紫：罪科の顔料・賜金圭角／06
中村剛彦：木霊／08
長尾高弘：日本解散／09
水島英己：嘆きのとき／12
倉田良成：二王子流竄記・祝祭譜／15

文

- 木村和史：老人ホームへ／18
中村剛彦：象徴の魔力 三／20
あとがき集／24

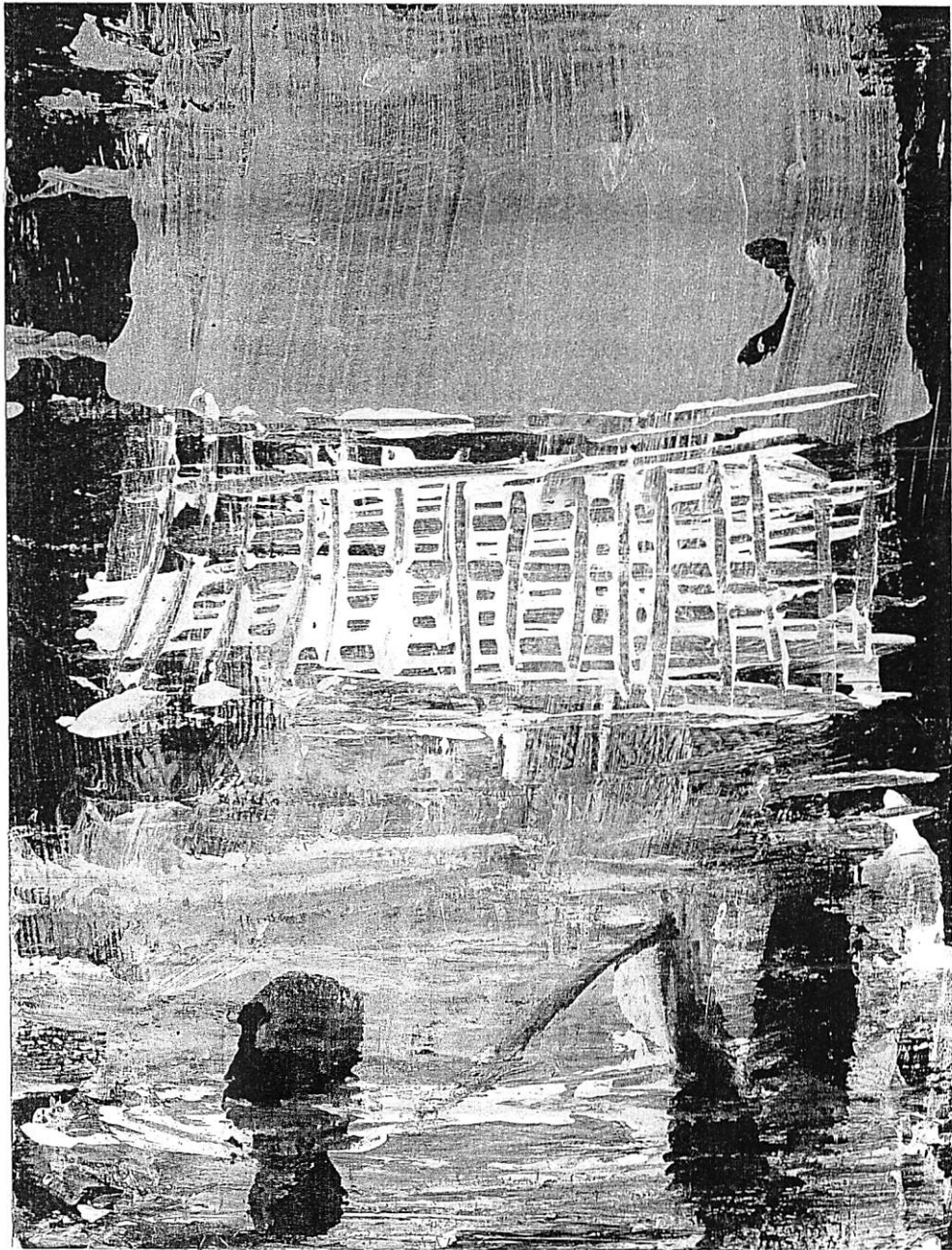
画：和田彰

表紙 第31号／2012年2月15日


編集発行人／倉田良成

〒23000078 横浜市鶴見区岸谷4-25-25 鶴見岸谷ハイツ201

Eメール／kateis11@k3.dion.ne.jp



Dies Irae


2012

後藤美和子

あいさつ

名刺の端を折って

ここに来たことを告げた

いとまごいに訪れた相手が

ふと外出していたものだから

これから名乗る名が

そこに書いてあった

みんな頭文字だけになって

短く乾かされていた

私の名字はあそこの看板かもしれぬ

いつしかパンを焼き

鑿は削り

煙を出して薪は燃える

略された叫び

あとは長いおじぎと

走り去る足と

開け放たれた通用門だ

(皆既蝕六一)

野村龍

蜂蜜の歌

金色の蜂蜜を滴らせて
合わせ鏡から雨蛙が出て来る

鐘の音は

逝去した老人の影を揺らめかせ

束ねられた風が

果実の香りを形づくる

私には子供がない

(蝙蝠は ひんやりした懐かしい夏のなかで いつしか溶けてしまった)

俄雨は

すれ違いざま 言葉をこぼして

《もう 忘れてしまったのか

瑠璃色の瞳に 焼き付いたはずなのに》

歌をひとかたまり 古井戸に沈め
ふさわしい涼しさを待つ

髪は さらさらと 靡きながら
流れ星を攔む

銀の眠気を 耳から注ぎ込まれて
おんなのこは翼になり

明日

たったひとつの瞳を 剝り抜かれるだろう

なにかが窓辺に来ている

磨き抜かれた食卓は 鴨料理を包んだまま 丁寧に折り畳まれ そっと戸棚に

仕舞われる

福島敦子

花

認知症はうんこをすりつけるから嫌い　たいへんだ
と言っていた人がいた

人ごとみたい聞いていたけれど

いま　うちは

それ　だ

トイレの白い壁が薄茶色に濁ってることに

気づいた　その原因が分かった日

ハイターでふいた

ジャパネトタカタで高圧洗浄機を買って洗った

夜中　おむつとすててこがこんもりと脱ぎ捨てられている

敷布団の毛布の上にうんこして

それだけだったらまだいいのに

掛け布団にもすりつけてる

ななめに走る茶色い波

捨てられるものは捨てて

洗えるものは洗う

今日は朝からずうっと　洗濯している

いいともが終わってしまった

いま　わたしは　たいへん　なのかな

きつと　わたしは　たいへん　なのだろう

でも わたしは 疲れた瞳をしながら
甘くうっとりした表情をしている と思うよ

どうしてかな 人って

そんなところあるんだろう

何か こう まだ開いたことのない心の中の花が開く感じ
が して

罪過の顔料

ここでは吹き矢は元より、ルージユも手榴弾もまるで効かない。あらゆる事象が渴き過ぎていて、黄葉の儚さに乗じて過失の相殺処理をすることすら覚束ない。たとえ乱世にあっても、毒針で愛を育む企みを冷笑するような輩が、朱色のシヨールを纏っていてはいけなのだ。征夷大將軍とその側女たちが悉く行方を眩ました後も、過去を蒸留し、気配を薄めている者たちを遍く束ねて、軍議は続く。アレグレット。木枯らしが小ぶりな心臓に悪さをしでかす前に、いつそ手鞠になって向こう岸に転がっていつてしまおうか。

例えば、嘲弄の表情を湛えた如何にも怪しい陶磁器があつたら、そこに詐欺・脅迫・錯誤の要素を読み取ることは容易であろうが、残念ながら大抵の陶磁器は白く眩い。

心優しい者なら、高層ビルの断面が本当はサーモンピンクになっていることを知っているはずだ。ただ一度しか訪れない狂気に苛まされたことがあるなら、なおのこと。

(詐害行為がもたらす)鉛の渦と(不当利得に誘われた)ベンガラの沈殿から(愒気の焰を対償とする)罪過の顔料を作ってみよう。アンダンテ。呻吟の末、沸点を超克した辺りから悠然と薄汚れた白壁に対峙し、一気呵成に深紅の龍を描く。合戦において矢面に立つことと、報われぬ想いに身を焦がすことに本質的な差異はない。色恋の渡世は赤字決算を原風景としているように見えて、その実、債権・債務の混同による消滅が常時繰り返される中、月が傾くようにただ欠落したもののだけが強調されているに過ぎないのだ。

賜金圭角

事物は貴人の手触りをもって心当てに取り決められ、多くの場合、放物線を描きつつ、もしくは感情線を経由して下賜される。アマリス。盲目の少女がスカートの裾を気にしながら崖上で綾跳びをしているのは、劇場を模した取調室で終日催される学芸会をこれ以上見ていられないから。ここでは孤独や永遠ばかりでなく、抑圧でさえも床運動を強いられる。拡声器を通して囁かれる愛。常闇の裡になされる暗転。踏みしだかれた女郎花。雷鳴は主旋律の責務を忘れ、ただ無用な転調を繰り返す。矜持や反骨といった連中は既に百葉箱に軟禁され、虚無や嘲笑などの面々も何処かに連行されてしまった後だ。心配には及ばない。間もなくこの中で誰が一番卑怯かを決する競技が始まるはずだ。

中村剛彦

木霊

巡礼の旅へ出た双子の兄弟は

西方と東方の土地で死んだ

一人の骸は王国の水路に流れた

一人の骸は砂漠に消えた

時は同じであつた

母親はその報せを聞かないままに

森の動物たちとともに老いていった

子らの夢は幼いままに

食卓に置かれた手縫いの手袋は色褪び……

そしてその日がおとずれた

一匹の虎が立ち止まり振り向く

梟が旋回して木の頂にとまる

半月の凍る湖水の波は静かに揺れつづけ

母親は暁闇の空を仰ぎ杖を落とした

森はいつまでも森のままであつた

日本解散

詩人を予言者になぞらえる伝統は、詩人というものが、予言者とはほおなじように遅れて時代を反映するものだという意味で使われているかぎりには、認めてもよからう。

——トロツキー『文学と革命』

しょうがない。

こうなったら解散だ。

領土がなければ、

国家など成り立たないのだから。

と言っても、

よその国に領土を取られたわけではない。

自分たちで勝手に領土を失ったのだ。

さらに言えば、

領土はなくなっただけではない。

地面は残っているし、

占領されているわけでもない。

しかし汚染されて住めないのなら、

ないも同然だ。

引き返すチャンスは何度もあった。

たとえば、二十年前のあの大地震のときだ。

福島の原発が壊れて、

多くの人々が家と故郷を奪われた。

福島以外の人々も、

あの痛みをわが痛みと感ずることができたら。

いや、あのときでも、

少なくとももう原発は止めようと、

思った人の方が多かった。

一度は首相でさえ、

将来的に原発に依存しない方向にと
言ったのだ。

その首相は袋だたきにあつて
引きずり下ろされ、
新しい首相がぬるつと出てきた。
長い話をまとめて言えば、
結局民意は反映されなかった。
デモに六万人集まろうが、
その日が過ぎてしまえば、
何もなかったかのようだった。
東北で大地震が起きると、
十年後には関東で大地震が起きる。
それから十年後には、
東海、東南海、南海で大地震が起きる。
そういうことは二十年前にも
言われていたことだ。
なぜ地震はもう起こらない、
原発事故はもう起きない、
そんな流れで国が動いてしまったのか。
放射能がまき散らされても、
除染すれば帰れるかのように言い、
それどころか除染しなくても、
帰っていいから帰りなさいと
何ごともなかったかのよう
に
したがったのはどうしてなのか。
そして、なぜ被曝の恐ろしさを
過小評価してしまったのか。
死者が出ても放射能のせいではないと
言い張っていたのはなぜなのか。
因果関係を認めるときには、

もうボロボロだったではないか。

何を言ってももう遅い。

中身はどんどん薄くなっていったが、
憲法に九条があったのはよかった。

その前の部分はよくわからなかったが。

いずれにしてももうおしまいだ。

みんな、さようなら。

バラバラになってもお元気で。

(2011年11月)

水島英己

嘆きのとき

春は瑞々しい忘却のはじまり

新井豊美

老婆の悲嘆が脈拍のように聞こえる

飢饉や戦争も一回だけってことはなかった

厚着をした人たちが自分たちの神様を祭っている

あなたは

森の入り口で

洞穴のそばで

愛らしい獲物の罠にとらえられたまま

寒さの底で心が凍てつく日

燻製にした虹鱒の腹に埋められた桜の破片を想う

「それは光だったのか？」 Was it light?

「内なる光だったのか？」 Was it light within?

「内なる光の内なる光だったのか？」 Was it light within light?

私の糸をかじるものはいないが

紫の棚雲から幽かな光が射し込んでいる

傷ある湖を渡る神の傷跡

開封された手紙の文字が光に触れるとき

海原の小舟のように流れて

十分に遅く（アダージョ・アツサイ）

うねうねとした道

そして、きわめて速く（プレスト）

歳月は忘却と傷を縫合する

五分と五十五秒

私は西の窓にかかるカーテンをすべて開けてみた

密集する屋根の上

光暈のなかから出現する沈むものの静かな意志

五色の光の中の五色の糸 もう一人のおまえの幻

雲で覆われた夜空に、そこだけぼつかりと満月が刻まれていた。頭を後ろに傾けて見る天心の月だ。自らが宙吊りになるような感覚にとらわれる。まっすぐに月に向かって吊り上げられていく軽さ。月に映る地球のキャベツ畑。

「語るべきことはもうなにも残っていない」。オハイオよりはとくにここでは。ありがとう。稲藁の匂いを嗅ぎたくて、稲架のそばに寄ってみた。晩秋、初冬とつづいて悲しい物語だけを聞かされた。「聴くべきことはもうなにも残っていない」。

父のぬらした紙おむつを捨てながら

ぬらさない涙でしなびたペニスをぬぐう

少しづつ減ってゆくグラスのなかのウイスキー

小さなものたちの死の峠を通過し

貧しい生の斜面を転げ落ちながら

こんなに荒れた地面、それでも実るもの

終着駅の灯りがかすかに見える。半島の突端の駅の錆びたベンチから見る海

に沈む夕日。長い時間をかけて燃え尽きてゆく自然。ここに坐っているのは初めてなのに、数え切れないほど繰り返された習慣のようにも思われる。あの陽の反照のなかにもう一人のお前の歓びと絶望が凍りついている。

「ラピス・ラズリの青のなかに我が身を砕き入れよ」と師はのたまへり。時を経ていかなる叡智か我が身に來たる。「我が身を貧しき歌で飾れ」とも。一人のデイサイプルは「師よ、我が森はかくも美しき」と唱ふ。一人のデイサイプルは我が身を脱ぎ、裸になる。

（"Deceptive Cadence" の一部）

註（レトキーとベケットの作品からの引用がある。）

二王子流竄記

その国の大王が弟の王を殺した。鹿狩りの折に耳にした近習のものの讒言によってである。あるいは最初から、大王の偉大で冷酷なその振る舞いから推すに、殺す意思があったのかもしれない。狩り場に立ち、馬上に並んでから矢を抜いてやにわに弟王を射ころしたのである。まだ血の匂いのする遺骸の身を切り、馬の桶に入れて土中に埋めた。このことを聞いてから、まだ少年である弟王の二人の遺児、すなわちオケ王・ヲケ王はただちにその場から脱出した。逃走経路を詳しくたどることを得ないけれど、おおむね次のような伝承が残されている。アフミからヤマシロまで一目散に逃げてきて、ちようどカリハキという井戸のほとりまで来たとき、一人の老人がやって来て二人の乾飯を奪った。老人は黥面、すなわち顔に刺青をしていた。二人の王子は、乾飯は惜しくはないがお前はいったい誰なのか、と尋ねると、自分はヤマシロの豚飼いだ、と答えた。そこから河を渡り、キツのカリハタから長駆、タンバないしタンゴのヨザまで逃れた。また、一説にマイヅルに行宮を作つて潜居したとも。また、一説にはミヤヅのナンバノとも。ナンバノの人々は王子の出立を見送つて大きな赤飯を作つたと伝えられている。ナンバノを出るとオホウチ峠を越えたのだが、これは別名王落ち峠とも言われる。そこを越えるとタンゴのミヘであるが、その長者であるイソカノマクロヒトが二王子を牧童と見せかけて庇護した。異なる伝承によれば、二王子はカワチカタノのクズハの渡しからヨドガハを越えて、ハリマのクニに入り、身分を隠してシジムのムラヲサの家で、それぞれ馬飼ひ、牛飼ひの役に従つたという。この二王子に付き従ひ、後見役を務めたものにクサカベノオミというものがある。ともにハリマのクニまで逃れてきたが、二王子と隠れていた岩屋で、まずこれまでと観念したうえで二王子を密かに逃がし、自らは頸を縊つて果てた。馬飼ひ、牛飼ひの役に就いたのはそののちのことである。あるとき、ヤマベノムラジヲダテというものがハリマの長官に任じられたとき、ニイムロホギにシジムのムラヲサのところへも行ったのだが、酒と祝ひのたけなわ

の中、火焼きの童の少年二人、実は馬飼いの牛飼いに身をやつした王子たちが
寵のほとりで火の番をしているのを見て、彼らにも舞わせたが譲り合つてな
かなか舞わない。ついに兄がまず舞い、ついで弟が次に舞った。同時にナガ
メゴトという業をおこなつて、最後にこう言った。イザホワケノスメラギノ
ミコ、イチノベノオシハノミコノ、ヤツコ、ミスエ（イザホワケ天皇の血を
分けた、イチベノオシハノ皇子の、王の御子である私ぞ）。ここにヲダテノ
ムラジ聞き驚いて床より落ちまろび、余人をすべて追ひ払つて右左の膝に乗
せ、また泣き悲しんで、仮宮を作つてミヤコに早馬使いで告げ知らせた。そ
のころ、酷薄な大王はすでに薨じていたのである。二王子の伯母、イヒトヨ
ノオオキミはすでにその二王子の行く末、生死を諦めていたのだが、これを
聞いて大いに歎び、宮に上らせた。ヲケの大王、ついでオホケの大王の御代
がこのときのこと。

祝祭譜

ヤムタラではどよめきとともに「その時」はやつて来る。一年に数回、な
いしは数年に一回の頻度で聖なる騒動が起こるのだ。「その時」のために数
か月前から準備される、さらにこまかく分節された小祭事がある。このさい、
精通以前、月経以前の年齢の子どもは別として、男の集団と女の集団とが注
意深く分け隔てられる。その永いモノイミの期間、男・女とも、アイリスや
ホトトギスや暗い空をながめ詠めて日暮らしをするのだ。禁忌の対象は事細
かに及ぶものがあるけれど、方位に関する事、色彩のタブー、男女の別
に関する事、食餌のタブーなど、総じてはあまりに厳しいという類のもの
はない。このモノイミの果てにあるのは、言うまでもなく一種のマツリ状態
であり、爆発的騒乱だ。だがもっとも重要な儀式はたいがいマツリの直前に
ひっそりとおこなわれる。このマツリの中心的概念といふべきものは、マツ
リの意義をなすものであると同時に、最も空虚な中心でもあつて、いわば語
根が活用を持ち、言語が用法のうちに姿を現すごとき、言葉のあらわれにつ
いての秘事だが、そのこと自体は明かされることはない。もっとも厳肅な場

面は重々しく始められるけれど、その実際は驚くほど速やかに過ぎ去って、果てしなく続く後夜祭の本格の開闢をわれわれは見ることになる。まずしずしずとあらわれるのは、火食鳥、穴熊、青々としたバナナの房、大陸蜜柑、太刀魚やヤドカリの燻製などを前菜とした、大ディスプレイである。当然食するわけだが、これをおこなう前にバと呼ばれる聖水の散布がある。例によって呪い師がもつぱら執り行うわけだが、この場面に限り、聖職者は巨大な仮面をつけて「それと知られないように」会衆に相對する。それはいったん死者となることをも意味しているのだ。いわば「棺桶の底を抜くもの」。振る舞いは当然これに留まらない。サゴヤシからとった弱い酒、高地地帯からとれたオリザネという穀物を搾った強い酒、さらにまた血圧を異常に低下させるアルコールとは異なる酔い方をする飲み物が振る舞われて、さらにまた肉が出る。肉といつても一種類ではなく、それは例えばこんな風である。まず疣猪の中に大蟻食の肉を包み、あいだを血脂で埋め、さらにアライグマの肉をビーバー肉に詰め、あいだをさらに肝臓で埋め、同じ大きさの七面鳥を無理やり押し包んでさらにそれをホロホロチョウ、野兎、キジバト、鶉と順を追って行き、さいごに鶉の心臓の高貴なる油の一滴を、選ばれたものが賞味するのである。だがしかし、この「選ばれたもの」はときとしてまったく違う局面であらわれることがある。先ほどの祭司ががらりと様相を変えた隈取りで先導する中、しずしずとまた大円卓にご馳走が運ばれる。さいしょみんなはそれが何かなのか、分からない。立ちのぼる湯気が霽れるに従って、付け合わせのマテ芋、香り高いセイヨウニガゼリ、黄色いトマトやアメリカセロリの中心に、見事に調理されたヒトの形のものが見出される。それはまことや、大喧噪のうちに見出された王の姿である。こうして王は次々に交代して、凄まじい食欲のうちに蕩尽されるのである。

老人ホームへ

雨が続いて仕事にならないので、帯広の老人ホームまで、父と母に会いに行くことにした。弟子屈から車で三時間ほどで、それほど遠い距離ではない。本当はもっと頻繁に行ってもいいのだが、母がわたしの工事の遅れを心配して、こっちは大丈夫だから早く家を作りなさい、と言ってくれているし、わたし自身にも焦りがあつて、ついつい足が遠のきがちになる。この夏は、遊びに来た友人たちと観光地めぐりをしたりして、二ヶ月も顔を出さないことがあつた。そんな横着ができるのも、老人ホームのお世話になつているおかげといえる。

電話は毎日するようにしているのだが、どこをどういじるのか、父の携帯が留守電になつていて、何回かけても出ないことがある。そんな日が続いて、向こうからもかかつてこないときさすがに、弱った親を放置しているという後ろめたい思いが積もってくる。一週間ほど連絡がつかなかったときに、ホームの看護師さんから電話がかかってきた。父の幻覚がひどくなつて、向かいの女性の部屋に入り込んだり、夜中に徘徊して職員に連れ戻されたりしているという。電話が通じなくなつていることを説明すると「そうですか、それでしたんですね、お父さんの具合が悪くなられたのは。そういうときは遠慮しないですぐご連絡してください、携帯をみてあげますから」と、やんわり叱られた。

父と話さない日がつづく父の調子が悪くなる、と感じるときがたしかにある。わたしと会話することで、父の脳に正常値のようなものが喚起されるのかも知れない。混乱した症状に隠れている本来の父に淡々と話しかけるから、本来の父が答えようとする。その程度のことだとは思うけれども。

二年前に厚生病院でレビー小体型認知症と

診断されたとき「すぐに介護度があがります」と医師から宣告された。パーキンソンの症状が出て体が不自由になり、いずれば寝たきりになる。そのような覚悟をしなければならぬということだった。すでに症状が出て背中が丸く屈まっていた父は、先生の前で子どものようにうなだれていた。

その日の夜中、いつものようにひたひたと歩き回る父のスリッパの音を耳にしながら眠つていて、ふと目を覚ますとベッドに父の姿がない。朝の5時になつていて。居間に布団が敷いてあつて、玄関にも敷いてある。そして父がどこにもいない。初めてのことでつた。徘徊だとしたらこれから毎日、夜中に歩くに違いない。鍵をどんなふうにかけたらいいだろう。警察に連絡しないといけないだろうか。そんなことを考えながら、どこを探したらいいか途方に暮れて外に出ると、そこへ父が帰ってきた。ちゃんと靴を履いて、手にも靴をぶら下げている。

「どこへ行ってたの？ よく戻つてこれたね」「軽トラが停まつたから、分かつたんだな」「誰かに会わなかつた？」

「新聞配達に会つた」
冬が迫つていて、しばれる夜だった。布団が敷いてあつたのは、人がたくさんいて、その人たちのために敷いてあげたのだという。

そのとき、よし、治してやろう、と覚悟を決めた。温厚でけつして怒らない、幻覚に翻弄されておかしなことをする父が無性に可愛かつた。

レビー小体型認知症の人は薬に弱い、と医師から聞いていた。薬に弱いということは毒に弱いということだろう。体に毒を入れず、体から毒を出すようにすれば、なんとかなるのではないか。父の持病みたいになつてい

便秘をまず解消しなければならぬ。症状に波があると言われているのも、脳のレビー小体というタンパク質が増えたり減ったりするからではないだろうか。それなら、それを減らせばいい。そんなふうに分流に想像して、食事療法を徹底的にやってみた。整体流のマッサージも毎晩やって、体の様子を感じ取るようにした。

父のなかでは、プライドや体裁や権威や、いろいろなものが次々と崩れ落ちようとしていただろうが、わたしにとつてそんなものはどうでもよかった。わたしの人生にずっと不満を抱き続けてきた父に、そんな気持の余裕がなくなることが、わたしを自由にしたような気がする。ふたりのあいだにあつてふたりを隔てていたもの、もしかしたら一生隔て続けて終わってしまったはずのものが、あるとき不意に氷解する。60年経ってそんなことが起こる。わたしにとつて、弱った父こそが理想の父だったということだろうか。

厚生病院で新しい薬を処方してくれた効果もあつて、二ヶ月ほどで父の幻覚が消え、認知症がほとんど治ったみたいになった。そのまま父と暮らしていれば、再び悪化することはなさそうに思えた。でも、いつまでも東京の家族のもとに帰らないわけにはいかない。

有料老人ホームが見つかって入れることになったとき、父は近所の人たちに、どんな話が進められてしまつて、とこぼし、母の口から不平不満が止むことはなかった。

実家のある足寄から、高速道路に入つて帯広に向かう。父と母がふたりとも大変だったとき、高速道路を使うことをなぜか思いつかなかつた。真冬になつても、凍りついた一般道を走つて病院へ通つていた。長いあいだ放つておいた父と母の暮らしと風景を、さかのぼつて辿らねばならないと思ひ、そこを離れて40年になるわたし自身の不在感を、道ばたの変わらない風景に重ねようとしていたのかも知れない。

午後二時過ぎ、老人ホームに着く。看護師さんに父の様子を訊くと「よくないです」と

いう。血圧の変動が激しいらしい。車椅子で食堂に運ばれ、食事も食べさせてもらっているのだそうだ。それから母の部屋に顔を出して、母の体調や父のことなど聞いていると、職員が父を車椅子に乗せて連れてきてくれた。父の表情はうつろだ。体が斜めにかしいで、前屈みになっている。

「木村さん、息子さんが見えられてますよ」職員は父に声をかけ、わたしにも会釈をして部屋を出て行った。

父はさらに体を折り曲げて、足先へ手を伸ばそうとする。立つつもりらしいので、手を貸して踏み台を畳み、片足を降ろしてあげた。が、そのままの方がいいと思ひ直し、足を持つてまた踏み台の上に戻した。

「饅頭を買ってきたけど、食べるかい？」
「おお」と父が返事をする。もともと食べるのが大好きで、甘いものには目がない。認知症になつてからは、とくにそれが目立つようになつた。紙をはがして、父の手に饅頭をのせてあげる。それをじつと見つめている。ごみがついていたり、腐つていたりするように見えるののかも知れない。幻覚があるときははいつも、糸くずをつまむような仕草をする。

「大丈夫だよ。腐つてないよ」

考え込むように右手をゆつくり動かして、左手の饅頭をつまもうとする。それがうまくいかない。左手からじかに口に持つていくこともできないようだ。

ベッドに腰かけている母を見ると、しょぼんとした顔で、うつむき加減に宙を見つめている。おかしくなつた父に反応して自身も精神状態を発症してしまつた母が、職員の話によると今では、倒れないかと心配するほどの面倒をよくみているのだそうだ。無理しないで職員に任せた方がいいよ、と言つたことがあるが、だって夫婦でしょう、と母は答えた。精神科に入院していた母を認知症の父は、俺が面倒をみる、と言つていた。母の方がいくらか、足が地についているかも知れない。

象徴の魔力 三

これまで蒲原有明の象徴詩について短く書いてみたが、結局「象徴とは何か」という壮大な問いは立ててこなかった。というのも蒲原詩の象徴体に私が最も畏怖を感じるのは、端的に言えばその「日本語」の「捻れ」によって開かれた傷口から何とも言えない暗いエロティックな感触を得られる点であり、言うなれば私にとって「象徴」とは、本来言語化不可能な人間本性の欲動の叫びやうめき声
が、一民族言語の内部からその意味構造や言語体系そのものを打ち破るダイナミズムにあると言えるのである。その欲動とは蒲原が自ら述べるところの「絶体絶命の性欲」（『夢は呼び交す』）である。

この「絶対絶命の性欲」と「一民族言語」、これを各々に詳細に突き詰めると、これまたフロイトだとかレヴィーストロースだとかと考えてみただけでも途方もない問題が浮かび上がってきてしまい、私の手にはおえない。しかし詩人とは今も昔も、ひたすらこの問題に徒手空拳で挑み、失敗の連続の中で生涯を生き死んで行くのであって、客観視すればいかに不毛な人生とも言えるが、それも詩人の運命である。思えば私も性欲高ぶる思春期に、自らの肉体と精神を切り裂くような無気味なエロティックな感覚を何とか言語化しようとしていたところから詩が始まっている。よって蒲原有明の詩語にみる「肉」と「霊」

が切断される断末魔のごとき象徴体に魅かれるのも、結局は自分の詩の原体験を蒲原の詩に見出そうとしているのに過ぎない。ただ、これが私だけの嗜好なのかと言えばそうでもなさそうであることが最近分かってきた。なぜならそもそも日本近代詩の黎明期を見れば、実にこの「エロティシズム」の問題が西洋から最初に詩の根源として差し出されているからである。

ものね 聲曲

われはきく、よもすがら、わが胸の上うへに、
君眠る時、

吾は聴く、夜の静寂しじまに、 滴したたの落つるを將はた
落つるを。

常にかつ近み、かつ遠み、絶間たえまなく落つる
をきく、

夜もすがら、君眠る時、君眠る時、われひ
とりして。

これは上田敏『海潮音』（明治三十八年）の冒頭に掲げられたガブリエレ・ダヌンツイオの長短二篇のうちの一つである。

この幻聴のごとき「滴したた」の音が何を指すかは具体性などなくともいい。男性と女性では感覚が違うかもしれないが、この四行に凝縮されたセックス後の身体感覚は、実に最後

の「われひとりして。」に集約されるように、他者との肉体的交わりが、精神の絶対孤独の発見へと至るといふ、いわば「肉」と「霊」の分裂を示している。そして非常に興味深いのは、こんこんと眠る相手の女性に対して、男性である詩人は、どこからか聞こえる「滴」の音にいつまでも覚醒したまま聞き入っているその対照性である。ここに私は「肉体」―「眠り」―「自然」、**「精神」**―**「覚醒」**―**「超自然」**という切断の縮図を見るが、これこそ実はボードレール以来の近代詩が切り開いた「象徴」の根幹にある、「近代」特有の男性主義的エロティシズムであると考える。

そもそもボードレールの『悪の華』の初版が産み落とされた一九世紀半ば（一八五七年）とは、産業資本主義の発展期であり、大都市インフラの整備によって夜の街に灯が灯され、二十四時間馬車は行き交い、男どもは毎夜、酒場と娼館へと足を運ぶことが可能になった時代である。まさに「眠らない街新宿」がこの世界に産み落とされた最初の時代とでも言おうか。もはや都市には人々を眠りに誘うナイチンゲールの囀りはなく、「超自然」の不眠の「夜」の世界が出現する。以前私は資本主義がもともと中世社交界における男性が女性の肉体を求めするために捧げる富が原動力になって発展したことを、宮廷恋愛詩を引用しながら論じたヴェルナー・ゾンバルトの『恋愛と贅沢と資本主義』を読んでほくそ笑んだことがあるが、まさにボードレールはその「宮廷」が消え去った資本主義が産み落とした「不夜城」の社交場、売春窟で、阿

片と葡萄酒を浴び淫蕩に耽りながら、「悪」の「象徴」を生み出したわけである。そしてそれはもはや「自然」の眠りには二度と回帰し得ない「不眠症」の、「近代」の男性主義的な絶対孤独を呼び覚ます。ボードレールは言う。「放蕩のあと、ひとは常に、より孤独に、より見捨てられたように感じる」（「火箭」と）。このボードレールの象徴詩の衣鉢を継ぎ、二十世紀を跨いだダヌンツィオが、性交の果てに耳にする「滴」の音が何であるかは極めて切実である。実はこれは小説『死の勝利』の最終章に書かれた詩である。詳細は省くが、世俗を断ち切り一人の女と孤島に渡って淫蕩の限りを尽くす男が、最後には女を殺し、自らも自殺するまでのシーンである。詩に書かれた「滴」の音とはこのときの男の狂える脳髓に流れるシューマンやショパンのピアノの変奏であるのだが、やがてそれはワーグナーの「トリスタンとイゾルデ」の、「飽くことを知らぬ情欲が破壊の陶酔にまで高ま」る大オペラへと発展し、その絶頂で二人は島の絶壁から海に転落するのである。

このデカダンスの極地を描いた小説を私は嫌いではないが、果たして上田敏はこの小説の中の詩であることを知って『海潮音』に載せたかどうか明確には分からない。しかしその詩のみからも、詩人である上田の直感はこの頹廢の世界こそが近代日本に齎すべき最大の詩美であったと考えていたことは間違いない。なぜなら『海潮音』の終結もまたダヌンツィオの詩二篇で締め括られているからである。

海光

兒等よ、今晝は眞盛、日こゝもとに照らしぬ。

寂漠大海の禮拜して、

天津日に捧ぐる香は、

浄まはる潮のにはひ、

轟く波凝、動がぬ岩根、靡く藻よ、

黒金の船の舳先よ、

岬代赭色に、獅子の蹈留れる如く、

足を延べたるこゝ、入海のひたおもて、

うちひさす都のまちは、

煩悶の壁に惱めど、

鏡なす白川は蜘蛛手に流れ、

風のみひとり、たまさぐる、

洞穴口の花の綿や。

この詩「海光」をどう取るか。私は『死の勝利』の最後に男と女が逸楽の果てに身を投じた、「トリストアンとイゾルデ」の残響が未だ消えぬ海の風景を重ねる。すれば『海潮音』のタイトルが暗示するのもまた、ダヌンツィオが求めたデカダンスの「死の海」である。

ここまで来れば気付く者もいると思う。このダヌンツィオが示したワグナー的リビドー全開のデカダンスは、そのままファシズムの美学へと直結する。ダヌンツィオがイタリア・ファシズムの英雄となったことは周知の通りであるが、日本近代詩の方向を決定づけた上田敏『海潮音』に、すでにこの「死」を礼賛するファシズムの種が植えられていた

ことを鑑みると、その後の日本近代詩が辿った道程ははるかに必然であると見えてくる。そして何よりこの『海潮音』から「象徴」のいろはを吸収し完成された蒲原有明の象徴詩を偏愛する「現在」の私自身の詩想をどう捉えるべきかが問われてくる。

先に私は蒲原の詩の魅力をその「日本語」のエロティックな「捻れ」と書いた。実は蒲原の詩に限界を感じる唯一の点もまた同様のところなのである。言い方は変であるが、この「捻れ」が「捻れ」のままに一向に解かれず、いつまでも深い傷を「日本語」に刻みつけてのみである。その「絶体絶命の性欲」は、ダヌンツィオ的な「死」の「絶頂」のエクスタシーへとは解き放たれない。それ故に蒲原は、戦争期においてもファシズムの美学に足をすくわれることはなかった。

実際にその実人生を見てもファシストからは程遠い。蒲原は明治期に日本象徴詩の完成者とまで言われながら、やがて詩壇からは忘却され、大震災と空襲によって家財一切を失い檻樓一つの流浪の身となり果ててしまった。戦後にたまたま鎌倉の川端康成邸を訪ねた野田宇太郎が、物置小屋となっていた茶室に侘びしく仮住まいしている蒲原夫妻を見つけ驚き、野田の主宰する雑誌に自伝小説『夢は呼び交す』の連載が書かれることになったのである。これが戦後間もなく昭和二十二年出版されると文壇では蒲原が生きていること自体に驚き、あわてて芸術院会員へと推挙したという（野田宇太郎『夢は呼び交す』岩波文庫「解説」）。

果たしてこのときすでに七十三歳になっていた蒲原にとって、その恩給以外にこの「入院」が喜ばしいものであったかは疑わしい。

なぜならこのとき蒲原の精神は、仏教的輪廻思想へと「解脱」をはじめていたからである。「夢は呼び交す」の最後、戦後の食糧難の時代、郷里の妻の親戚から送られてきた餅三つに添えられていた書状に書かれた親子の会話、「『ナイネ。』／『モチタイ。』／『ナイスト。』／『カマクラノオバサントコヘオクル。』／『インニヤ、タッタソイシコネ。』

／『オバサントコハ三人ジャモン。』／『ウウ、ソイギヨカネ。』」を読み、「これこそは真言である」と言つて涙を流しながら「呪言のようにこの問答を繰り返し」たとある（この問答の蒲原自身による標準語訳は以下である。

——それは何ね。——お餅です。——何をし
てるの。——鎌倉の伯母さんに送ります。
——あら、たったそれだけ。——伯母さんと
こは三人ですから。——うう、ではそれでよ
いのですね。)

では蒲原はもはや詩を捨て、仏門に入ったかと言えどもまたそれも違う。「後記」には執念の如く「日本語」の「捻れ」の詩が焼き付けられている。そしてこの詩句を凝視するにつけ、私は背筋が凍らざるを得ない。なぜならここには現代詩が今も中心に抱える「言葉」と「沈黙」の問題、「詩人」という存在の在り様、そして「詩とは何か」という大命題が凝縮されているからである。

冷やかな石に地熱を吸ふ獅子の恍惚。

われはわが頭に本より生れぬ言語を哺育み、
われは又わが心に本より死なぬ赤子を悲み
嘆く。

われはこれ梅檀の林、虚空の襲の大波、

高山の車輪の一行、一切の変装者、

隙もなく魂を食み尽すが故に無上の法楽—
わが密厳詩。そこに「同時」を貪る「刹那」
を聴く。

すでに「荒地」グループなどの戦後詩人ら
によってファシスト狩りがはじまっていた時
代、当然ながらこの蒲原の「密厳詩」は化石
の如く黙殺された。しかしこの「本より生れ
ぬ言語を哺育」み、「一切の変装者」として、
「無上の法楽」を絶やさず戦後まで「生存」
しつづけた詩人の「象徴」は、ファシズム以
上の「魔力」を秘めて現代詩の中心を驚掴み
にしているのではないか。果たしてそのよう
な事を考えているのは私だけであろうか。

わが皮膚は苦行の道場、閨房の絨氈、

confidence

アナログテレビが映らなくなって、ずいぶんになる。初めて買ったテレビだから、かわいそうで捨てられない。その話をしたら、二十年も前に家に遊びに来た友人が、そのテレビのことを覚えていた。なおさらに、捨てられなくなった。(後藤)

父の調子がこのところいいようだ。話も普通だし、食事も自分でできているという。朝の歩行が少しふらつく程度らしい。フェルガードが効いているのだと思う。老人ホームからケアプランが送られてきたが、不調のプランから順調のプランに変更されていた。このまま推移してくれるといいが。(木村)

倉田兄からお電話を頂いた。それから数時間、画面に変化はない。倉田様、どうかよろしくお願いいたします。(野村)

自分は芸術作品の価値の根源にあるものは、最終的には〈五感〉でしか味わうことが出来ないと考えていて、〈認識〉は鑑賞の入口において多少の手助けはしてくれても、〈五感〉にとつては逆にしばしば妨げにしかならない、という経験則を持っている。もちろん、自分自身もしばしば〈認識〉によって芸術作品に近づこうとしており、その矛盾を自覚してもいるのだが、例えば製作年代、作者の出自、作品の描かれた背景など、〈認識〉に属するものは所詮お勉強の世界、学術研究の成果のおさらいに過ぎず、どんなにそうした〈認識〉を深めた所で、自分自身の〈五感〉でその作品をストレートに味わうことに勝る訳ではないと思う。作品そのものから〈感じる〉ことこそが、作品鑑賞の醍醐味であり、鑑賞者にとつての最終的な価値基準の決め手になるのではな

いか。それは、人を好きになることに似ている。我々は、決して履歴書を見て人を好きになったりしないはずだ。(秋川)

ネットにアクセスされている方には、今回の「日本解散」は、なんだまたかよ、と思われてしまうかもしれませんが。書いた直後にFacebookに投稿しましたし、Twitterのプロフィールにもこの詩へのリンクがあります。でも、ネットにアクセスされていないけれどもB5の紙の方は読んでいるという方もいらつしやるはずで、そういう方に読んでいただきたいと思ったわけです。B2以降、B5に載せていただいた詩は、みな原発モノで、前回の近況などは原発本をずらりと列挙したりしたもので、さぞかし頭に血が上っているのだらうと思われているかもしれませんが、このところ感じるのは、セシウムよりも早く薄れる我が関心ということです。そういう状態に焦りも感じています。昨年11月は政府が収束宣言を出しそうだという報道がなされていた頃で、それに抗うつもりで書いたのがこれです。今はもうこんな気持ちでは書けません、改めて自分の立ち位置を見つめ直すつもりで、これを掲載していただこうと思った次第です。(長尾)

二年前の夏に母が重病で入院した翌日に、一匹の子猫が庭に現れた。まだ生まれて数カ月くらいでとても小さかったが、人懐っこく私が庭に出ると足元に尻尾を巻きつけてくるのであった。犬を連れ出すとへっちゃらな顔で犬の鼻をぺるぺる舐め、ついには散歩にまできやつきやつついて来るのであった。それからずっと猫は庭に住み着き、私の日々の楽しみは猫と犬がじゃれ合ったり、一緒に眠ったりしているのを眺

めることであつた。しかし一カ月ほど前に突然姿を消してしまつた。母の病気が全快した数日後である。そしてまた数日後、庭の隅に黄色い花が咲いた。母が、きつとあの子よ、と言つた。そうかと私も腑に落ちる思いがした。淋しさは少しずつ和らいできた。(中村)

訪問入浴の組み立て式のお風呂はどうしてお湯が漏れないのでしょうか。不思議です。振り返ると台所がお風呂場になつていて、いつの間にかお湯の中に父が寝ています。三人のスタッフが腕や脚や「お下のほう」まで洗つてくれます。髭も剃つてくれます。顔も拭いてくれます。気がつくとお湯は吸い取られ、ネットの上に横たわる父が現れます。なんて便利なイルージョン(?)わたしたちが老いた時にもこのサービスが分割負担で使えますように。(福島)

新井豊美さんが一月二十一日に亡くなられた。木村和史と二人で次の日の通夜に参列した。この西国分寺のお寺は佐藤泰志の葬式も行われた寺だということだった。木村君も生前の両者とながりがあつたわけだ。私は新井さんしか知らないが。新井さんが書いたもののなかでは(詩は抜きにして)、『苦界浄土の世界』と『シチリア幻想行』が好きである。この二冊の本は、私の中では深く通底している。不知火海と地中海をこんなに鮮やかに、しかも底深く結びつけた人は新井豊美だけである。私はそういう人としての新井さんをいつまでも読み続けていくだろう。(水島)

最近、どんなの聴いてる? と、10年ぶりに会つた友人に訊かれた。ライヴもののクラシックで、拍手は勿論、咳払いや椅子の軋みもちゃんと入ってるやつ。と答えながら、咄嗟に思い浮かんた演奏が、プリテ

ンのシンフォニアダレクイエムのCDだった。帰つて聴いてみたら、ライヴでありながら拍手がカットされていた。ああ! 怒りの日…

Dis Trae は、ベンジャミン・ブリテン作曲『鎮魂交響曲』より第二楽章 怒りの日。(和田)

手術をして頭の水を抜くようになって、それで最悪の時期は脱した。妻と医師とお世話になつたいるんな方々に感謝したい。ここで、思い切つて私家版めいた評論集を出す運びとなつた。本の題は『梲的思考』で、副題は「具体性の詩学」という。これまで小誌に発表してきた文章などが入っている。簡易な私家版と言っても、いちおう、値段とISBNコードはあつて、ワーズアウトの坂入進氏の肝煎りでつくつたものだ。氏は小誌の固定読者で、一度か二度、ここに書かれたこともある。ちなみに値段は一八〇〇円。一五〇頁ほどだが、原稿用紙にすると四〇〇枚と少しになる。お時間と勇気のある向きには是非。これは宣伝です。

(倉田)